

説文所引詩試釈

望月真澄

前言

清代の説文学は乾嘉の時代に高潮に達し、のち王筠に至っては説文の体例、文字学の規則を探索整理して『説文釈例』の大輪を開花させた。ここに爛熟を極めたと言うべきである。

そのため説文分析にすでに寸地の残されることもないことを痛感するばかりではあるが、小論の関心は、説文所引経文法の各経における特性・差異である。

別の機会（『説文所引春秋伝試釈』）には①今古文説並列呈示、②師資相承、③文脈明示による語義区分、④主義確定・多義区別、⑤同義連用・関用、⑥字体、⑦一地二名・一名二地などの項目を設けて、説文に春秋左氏伝が引用される場合の特徴につき記述してある。

所引詩の特性に所引春秋伝と濃淡を伴いながら重複する

ところもあり、しない部分は勿論大きい。所引諸経において、その引用意図に差異があるはずである。

漢書、芸文志には、

昔、仲尼没して微言は絶え、七十子この世を去って大義は乖いた。そのため春秋は五つ、詩は四つに分かれた。

哀樂の心は感じて歌詠の声が発せられ、その言葉を朗誦すれば、それは詩、その声をメロディをつけて歌えば、それは歌、である。

孔子はもっぱら周の詩から三百五篇を選び取った。秦の焚書の災難に遭ってなお詩が安全であったわけは、詩が人の口に歌われて、ただ竹帛に書きとめられただけの他の古典と違っていたからである。

と記される点に、説文所引詩の意味特性がすでに暗示されている。

即ち、朗誦の詩語には必然的に重言・連語・押韻の諸問題がクローズ・アップされるであろう。王筠には『毛詩重言』なる分析があるのもうべなわれる。

しかも、字書である説文にとつては、字形の問題は免れ難い。しかし、字形の問題として『詩』が引用されること『春秋伝』の場合に比べても多いのは意外であつた。

宋の陳振孫、直齋は『直齋書録解題』小学類において『韻補』の業績を評価しながら、この漢書、芸文志を承けるかのごとくにして、

昔の詩を学ぶ者は多くの場合、諷誦して愛好したので、ただ単に竹帛に書いたままではすまざなかつた。しかし、また一方、竹帛の伝えるものは文字に過ぎない。だから、その声音は伝えることができない。(略)陸徳明は「燕燕詩」で、古人は押韻が緩く字を改めるのにも面倒がらなかつた、と述べているが、これは誠に明言である。

と述べ、この『直齋書録解題』はまた顧炎武『音学五書』中に引かれている。

字形を論ずるに詩をもつて引用する、その縁因は誠に『經典釈文』毛詩音義も指摘する

〔于南〕今謂古人韻緩、不煩改字。

の「不煩改字」にあつたというわけである。

そこで小論も字形の問題から逐次推論していくこととしたい。

本論

1、字形(ないし艸部の実態)

論語、陽貨に「詩は多く鳥獸草木の名を知る」と詩を学ぶことの効用の一つが述べられているから、説文、艸部第十二、文四百四十五中に引かれる詩の引用度数はさぞかし多からうとする予想に反して、実際には二十八字に過ぎず、うち、純然たる草名は十五字に限られる。

ちなみに艸部中、諸経引用中、春秋伝二例を最高として他経からの引用はなお甚だ少い点から比較すれば、確かに多いと言えが多い。が、水部第四百十、文四百六十八中、所引詩字数二十九字と比較したとき大差は見られない。艸・水各部における、詩の引用字率は、いずれも六パーセントである。してみると、草木の言語材料に詩の引用を選んだわけではあるまい。

では、詩はなぜ引かれるか。煩を避けるため今、草名十五字の場合の実態をとりあげて考える。篆文は隸書に書き替えて「」に入れて示す。

㊦字形

○説文

〔蕙〕令人忘憂之艸也。詩曰安得蕙艸。

〔薺〕或从煖。

〔葦〕或从宜。

○今作（毛詩）

焉得諼草。

このように説文自体に或体が列挙されるばかりか、段玉裁の「今作」の注を待つまでもなく現通行の詩と字形が異なるものが、合わせて十五字中九字に達する。

㊧連語

〔芄〕芄蘭。莞也。詩曰芄蘭之枝。

このように疊韻連語で一草を表すものが一例ある。

㊨その他

このように字形・連語をその引用の主因と見て除外して見てくると、鳥獸草木の名を知るとい詩が、艸部で活用されているのは、よくみてもただの五字だけということになってくる。

しかも、今、この五字、蕓・藟・芩・萑・芾についても子細に観察すれば、あるいは段玉裁が〔搯〕字の注で指摘するような問題での引用である可能性もある。

一般に説文では字義を解説した上に経を引用して、その意味を解釈する場合、経の解説と字の解説とが異なっている点を明らかにしているのである。

今、この観点からこの五字の一つ、例えば〔蕓〕の場合、

字義↓佳也。（とり）

経義↓（くさ）

となる。

また、字義・経義を同じくして、更に別義があるという時、区別を明瞭にする必要があったのである。例えば

〔藟〕の場合は、

字義・経義↓艸也。（くさ）

別義↓一曰秬鬯。（酒）

となる。

なお、また付け加えれば、段注と同様な指摘は、王筠『説文積例』でも「説解変例」の項でとりあげている。

〔萑〕で、

字義↓口气也。

経義↓毛傳、重遲之貌。

〔説〕で、

字義↓致言也。

経義↓毛傳、衆多也。

などの場合である。

このように字形の問題でなければ、別の何らかの問題があつて詩は引用されている。その中でも字形の問題は枚挙にいとまがないほどに所引詩の字例を覆っているのであると言えよう。附表参照。

この実態は、どこにその現象の理由を求めたらよいか。勿論、前述の古人の「不煩改字」が背景にはある。

段注説文の「藿」の項をひも解くと、

○説文↓食鬱及藿

○今本、詩、幽風七月↓六月食鬱及藿。

○段注↓宋、掌禹錫・蘇頌皆云、韓詩六月食鬱及藿。許

於詩主毛而不廢三家也。
とある。

玉函山房輯佚書に韓詩のこの部分は採られていないが、段玉裁が「説文では毛詩を主とするが、三家詩をも捨てない」とする見解には賛成で、ここにこそ説文に字形の問題の比重の大きさを置かれる理由があるだろう。

なお、この例の場合、押韻上は現行の「藿」の方が、上古音分部上「幽」部であるから、

藿菽稻酒壽（押韻字列）

幽幽幽幽幽（上古音所屬部）

これが最も美しく、「藿」「藿」ともに屋韻となつてしまつた許慎時代に、つい許慎が韓詩に従つて誤認してしまつたのではあるが。

誤認は誤認として、ただ、ここには自由に言語の問題として字典を編集している許慎の態度を評価すべきである。

以上、字形の重要視すべきことを艸部の実態で示し、その理由について触れてきた。なお、字形を考察するうち気付いた、『説文解字詁林』の収める諸注のいずれも見落としてゐる次の二例にも言及しておきたい。

いずれも『慧琳一切経音義』からであるが、

〔攪〕について音義九十九卷三十三裏に、

〔攪羅〕毛詩傳云、攪攪猶織也。

〔攄〕について音義九十九卷二十一表に、

〔攄攄〕説文從水攄聲。集、從手作攄。音蒲溝反。韓詩云、攄聚也。

とあり、説文が

〔攪〕好手貌。詩曰、攪攪女手。

とする〔攪〕は、これこそ毛詩の原来の字形であつて、今本毛詩、毛詩伝とも、〔攄〕となつてゐるが、実は王筠『句

「誦」も言う伝写のミスであることが証明される。

〔掣〕についても段注説文が、

〔掣〕引堅也。詩曰、原隰掣矣。

とする〔掣〕は、今本毛詩、毛詩伝とも「哀」としてしまっているが、許慎は実は韓詩に依っていたのであることが判った。

周易、謙卦の『經典釈文』に、

〔哀〕鄭・荀・董・蜀才作掣。云取也。

とある点に着目して、段玉裁は「哀」が「掣」の俗字であると言ひ、王筠『句読』は、鄭玄・荀爽・董鈞らが僅かに伝統の「掣」を守り、後漢にはもう「哀」の字が写経者によって用いられたと指摘している。

沈兼士『広韻声系』を見ても「哀」と一系をなすもの、ただ特殊な一字があるだけである事実からも、「哀」が正統をはずれた俗体であることが首肯される。

後漢書、儒林伝を眺めていると甲儒は韓詩に従ひ、乙儒は毛詩と、それぞれ門戸の見を建てていて、張曹鄭列伝、論贊にも言う、

守文之徒、滯固所稟、異端紛紜、互相詭激、遂令經有數家。家有數説、章句多者或迺百餘萬言。學徒勞而少功。

後生疑而莫正。

というありさまになっていたのである。

こういう状況にありながら、許慎、説文は一家の説に滯固せず、紛紜と乱れる字形の整理に冷静であつたことがうかがえる。

2、今文古文説

字形の問題と截然と分けられるはずもないが、しかし、質的にはより礼制、ひいては思想との絡みを強める側面としての今文古文説は、所引詩の形態にいかにも投影されているかについて、次には考えよう。

張震沢の近著『許慎年譜』（一九八六、遼寧大出版社）では、許慎四十五歳、永初五年（西暦一一）をもって『五經異義』成立年とし、時に、説文はまだ正定せず、改訂を続けていたものと見ている。

今、便宜、『五經異義』のとりあげる点に従つて話題を拾う。

〔櫛〕或体〔鬢〕

○『異義』所引

韓詩説↓金鬢、大夫器也。（『玉函』になし）

毛詩説↓金鬢、酒器也。

許説↓鬢者取雲雷博施如人君下及諸臣。

○毛伝↓鬢、祭器。

○説文↓龜目酒尊、刻木作雲雷象、施不窮也。榘或從缶。
右で判るように、『異義』では〔罍〕器が、「大夫」に限定
される韓詩説に疑問を示し、「人君」という言い方を用い
ている。更に、説文、『異義』では、雷雲の文様が刻まれ
ている点に力点を置いて説かれる。

〔翟〕

○『異義』所引

公羊説↓樂萬舞以鴻羽。取其勁輕一舉千里。

韓詩説↓以夷狄大鳥羽。〔玉函〕になし)

毛詩説↓萬以翟羽。

許説↓翟、羽舞也。

○毛伝↓翟、翟羽也。

↓翟、雉屬也。

○説文↓山雉也。尾長。

韓詩説は〔翟〕が〔狄〕と同音であるところから、「夷
狄」の〔狄〕の仮借と見るものであるが、許慎はそれに反
対し、公羊説の言う「鴻羽」説も否定し、つまるところ
『異義』・説文ともに〔翟〕を「雉子」の意味に確定してい
る。

〔騶虞〕

○『異義』所引

韓魯詩説↓天子掌鳥獸官。(周礼、春官、鍾師、賈公彦
疏引)

毛詩説↓義獸。白虎黑文、食自死之肉、不食生物。

○毛伝↓義獸也。白虎黑文、不食生物者也。

○説文↓騶虞也。白虎黑文、尾長於身。仁獸也。食自死之
肉。詩曰于嗟乎騶虞。

以上の三例は比較的明瞭に今古文説に差があつて、それ
がまた説文に投影されている例である。

ときには〔觥〕における毛詩説の否定や、直接、毛詩に
も出て来ず、説文でもとりあげないが、『玉函』所収の『魯
詩故』では詳説される「聖人に父なく、天に感じて生ま
る」説の否定姿勢には、許慎の合理的科学的通儒の精神を
読みとることができる。

所引春秋伝の場合には、今古文説絡みのものが多く、し
かもそれを両説併記する場合もある。それと比較したら、
本質、文学作品たる詩経の場合には、はるかに事例数が低
くなっているのは当然のことであろう。

3、重言

上述のように王筠は道光庚戌(一八五〇)に、『毛詩重言』
の鋭い分析を提示している。

該書で王は、詩は詠歎するのを本質とするため、他経に

比して重言が多いとし、それは

④本義を踏まえず、ただ、音の響きに重点を置くことを専らとするもの、

「關關」「馮馮」の類。

⑤本義を引伸ばしながら、別のニュアンスを創出するもの、

「焯焯」「活活」の類。

⑥詩本文では単詞ではあるが、伝箋で重言を以って解釈されるもの、

「濛」「汎」の類。

という分類法で、それをそれぞれ上中下の各篇に分類揭示して見せた。

これを襲うようにしては、近著、朱広祁の『詩経双音詞論稿』（一九八五、河内人民出版社）などもある。

この朱広祁は、詩経の重言はすべて形容詞と見なしてよるしいとして語法上の問題も検討している。

小論でも王筠『重言』の④⑤ともに形容詞として扱うがよく、

定語↓關關雉鳩

状語↓肅肅宵征

謂語↓維葉莫莫

補語↓鳥鳴嚶嚶

など状態形容詞の機能をすべて備えていると考える。

朱德熙『語法講義』（一九八四、商務印書館）では重疊構造を多面的に現代語について追究している。朱德熙は重疊形容詞が状態形容詞となるとして、その意味機能面は、一般の性質形容詞に比し、暫時的変化の色彩を帯び動態的であると述べている。

王筠『重言』の①は擬態語・擬声語の類であるが、④⑤ともに重言の意味機能にはより動態的な趣がある。

ただし、⑥のような場合、現代語の形容詞重疊に比し、語素（つまり一字）と単語すなわち重言との質的差が大きいたく指摘される。

青↓あおい 青青↓美しいさかりのさま

熇↓あつい 熇熇↓もえさかるさま

4、連語

ふつう連綿字には①双声連綿字②疊韻連綿字③双声兼疊韻連綿字④非双声疊韻連綿字（鸚鵡・瑪瑙・妯娌）と⑤同音重疊連綿字が考えられる。そのうち④は前節のように『重言』として伝統的名称に従って論じた。また①の場合にはきわめて少ない。

説文は字形を整理基準としているため、一字一解とな

る。それを超える双音節一語の例は処理の範囲を超えてしまふことになつてしまふ。そのとき経典引用の必要が生まれ、とりわけ詩経がそれに適しいことになる。

① 双声連綿字

〔謔〕 戲也。詩曰善戲謔兮。

〔獨〕 獨獠。短喙犬也。詩曰載獫狁獠。

〔渾〕 渾浹。風寒也。詩曰一之日渾浹。

② 疊韻連綿字

〔芄〕 芄蘭。莞也。詩曰芄蘭之枝。

〔娑〕 舞也。詩曰市也娑娑。

③ 非双声疊韻連綿字

〔虞〕 騶虞也。白虎黑文、尾長於身仁獸也。食自死之肉。詩曰于嗟騶虞。

〔媿〕 帝高辛之妃。偃母號也。詩曰有媿方將。

以上、思いつくままに挙例してみた。なお詩中ではリズムの關係からか、連語にはならないが、毛伝では連語あつかいするものがある。

〔達〕 行不相遇也。詩曰挑兮達兮。

毛傳、挑達、往來相見貌。

〔嬌〕 順也。詩曰婉兮嬌兮。

〔嬈〕 籀文。

毛傳、婉嬈、少好貌。

〔嬈〕 女黑色也。詩曰嬈兮蔚兮。(今作薈)

毛傳、薈蔚、雲興貌。

なども連語の節に含めて考えるのがよいと思う。

ともかく、『爾雅』にあつては問題とならなかつた重言・連語の辞書編集上の限界とその克服の工夫が、所引詩の中に解決を求めるといふ方法でなされたのであつた。

5、押韻

すでに第1節〔藿〕の項でも問題とし、字形の問題とも深く関るが、ここでは所引詩が韻文であるという性格上、アプローチすべき押韻の問題がある。

〔玖〕 石之次玉。黑色者。詩曰貽我佩玖。讀若莒。或曰、若人句脊之句。

ここに引く詩は、王風「丘中有麻」からであるが、その押韻字を列挙すれば、

第一連、麻嗟嗟施 (上古部) 歌歌歌歌

第二連、麥國國食 (上古部) 之之之之

第三連、李子子玖 (上古部) 之之之之

となる。上古音分部は清、江有語『諧声表』に依る。

〔玖〕が押韻する例は、詩にあと一例あり、衛風「木瓜」に、

第一連、瓜瓠報好 (上古部) 魚魚幽幽
第二連、桃瑤報好 (上古部) 宵宵幽幽
第三連、李玖報好 (上古部) 之之幽幽
として表われてくる。

説文で許慎は「玖」を「芭」のように発音すると述べ、さらにまた、ある人は「句脊」の「句」のように読むとも紹介している。

この言語史上の問題はいかに考えるか、

〔玖〕 上古、之部、中古上声有韻

〔芭〕 上古、之部、中古上声止韻

〔句〕 上古、侯部、中古平声侯韻

本事例は上古中国語の之部合口音は、牙喉唇音を条件として、中古音流撰韻に推移したという音韻変化の大きな流れを背景にして観察するとき、よく理解できる。

この変化は前漢ころから徐々に進行していたことは、かつて論じたことがある。(『上古中国語の之部合口音について』その音韻推移と音価再構・一九七〇)

ちょうど推移過程中の混乱を説文はよくとらえて観察し、より古態の発音に規範化の意識を働かせているのが読める。

〔嬌〕 含怒也。一曰難知也。詩曰碩大且嬌。

これは今、陳風「沢陂」に一例のみ用例がある。

第一連 陂荷人何爲沱 ○歌○歌○歌

第二連 陂蘭人卷爲悒 ○元○元○元

第三連 陂蒼人儼爲枕 ○談○談○侵

このように第三連に今本は「儼」の字形で表われる。『説文繫伝』は、この引詩は「読若」であると逃げてしまう。

王筠『句読』も指摘のように、「嬌」に作るのは韓詩であり『韓詩故』には、実際、

碩大且嬌

太平御覽卷三百六十八とあり、

その太平御覽には、

薛君曰、嬌重頤也。五檢反。

とある。

〔芭〕は「菡萏」という疊韻語の語形で、「沢陂」には出てくる。

また、「菡」のつくりを共有する〔涵〕は、

小雅「巧言」で、

涵譖 (上古部) 談談

との押韻例が出てくるに過ぎない。

〔嬌〕における詩の引用は、本義でも一曰義でもない、

第三の意味、重頤(二重あご)の用法があることを示すの

が主目的かも知れない。しかし、収唇韻に材料乏しく、合韻を余儀無くされるこのような押韻例を、談・侵いずれの部と認定するかの問題も潜んではいないだろうか。

江有誥の『諧声表』における談・侵分部も暫定的なものではあるまいか。

6、所引春秋伝との差異

詳細は前述拙稿『説文所引春秋伝試釈』で述べたが、説文で、

〔有〕不宜有也。

春秋傳曰、日月有食之。

と〔有〕を説くに「不宜有也」（あつてはならない）という不思議な解は、それが実は賈逵『春秋左氏伝解詁』の、桓惡而有年豊、異之也。言有非其所宜有。

（桓公が悪いのにもかかわらず豊年だったので異変と見た。「有」と言っているのは、その豊年が有るべきものではなかったのである。）

を承けているのであった。

天人合一観はその災異思想において、董仲舒が君主権の放埒を規制するため考案したものと云われる。

「聖人に父なく、天に感して生まる」説を否定する許慎が、この〔有〕では、その災異思想の残滓を引きずってい

るわけで、これはのち杜預『春秋積例』に至って批判される。

この一例でも判るように、微言大義・一字褒貶の春秋伝の引用の場合には、いきおいかの白虎観論義にも連なるすぐれて政治的・思想的・倫理観的議論が、説文にも投影されているのである。

それに比較するとき、所引詩の問題はより言語学的（文字論・音韻論）・文学的（重言連語などの詩語）要請に基づくものと見ることができらる。

『文心雕龍』に、

人稟七情、應物斯感、感物吟志。

（人は七情をうけて生まれ、外物に感応しその思いを口に吟詠する）
と云う。

「説文所引詩・春秋伝対照表」で明らかかなように、重言連語欄は心部において、詩を引用すること多く七情表出にかかわり、同じく口部において詩を引用すること多く吟詠方法の状況をよく反映する。

逆に春秋伝に多く頼るのは地名であつて、邑部において詩の引用ゼロとよく対比する。

説文所引の詩は四百二十余例、春秋伝は百八十例、これ

はその母体総字数とそれぞれ比率を算出するまでもなく、詩の引用率が圧倒的に高い。そのためそれらしい傾向を顕示するため、比較的所屬字総数の多い部首からアトランダムに選ばした「表」である。

後語

黄侃は「むかしは竹簡が繁重でそんなもの手に入れ難く經学に通じた師から口移しに伝授されたもの、それ故にその後、書写するとうきとくに数体の字形の出現を見ることになるのである。だから例えば、説文の「詁」に「詩曰詁訓」とあるのを段玉裁が「告之語言」の誤りであるとすると、これは校訂に甚だ熱心とは言えるが多事（よけいごと）をしてと言うを免れない」『文字声韻訓詁筆記』（一九八三、上海古籍出版）と述べている。

アヘン戦争をよそに王筠は『説文積例』をものして段玉裁「通例」を整理したが、これまた精義に乏しからず顕微鏡で「衆山の小」なるを見るような趣がある。

小論はそのため逐字の詳察はこれを抑え、注釈も付せず、一つの小さな鏡で説文の一面を映してみた。もとより虚像に陥ること恐れないではない。

（金沢大学）

説文所引詩・春秋伝対照表

邑		足		辵		玉		口		言		心		木		艸		部	
184		85		118		126		180		245		263		421		445		文	
春	詩	春	詩	春	詩	春	詩	春	詩	春	詩	春	詩	春	詩	春	詩	經	
13	1	1	6	2	2	3	8	2	23	4	12	7	17	6	14	2	28	引次	
2	0	0	2	0	2	1	3	2	9	3	7	4	8	1	4	1	12	字形	
0	0	0	4	0	2	0	2	0	14	1	6	0	10	0	2	0	5	連語	
0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	押韻	